「自閉っ子、深読みしなけりゃ　うまくいく」を読んで

書籍:「自閉っ子、深読みしなけりゃ　うまくいく」を購読した。
長年日米の自閉症問題の取材を続けている著者が、現在は翻訳家であるアスペルガー症候群の方と、米国で長年自閉症児を育てながら音楽教師として過ごす方と、２人へインタビューし、その会話形式の編集だけに読み易い書であった。
日米の自閉症関係の現状、現実、問題点が、日常の質疑会話形式の中から浮かび上がり、さしずめ、日米の自閉症関係の特別支援教育比較論といった趣か。

障害児に限らず、米国は多人種国家であるだけに、個別指導プログラム、特別支援教育が充実しているようである。
また、診断もＤｒを含め数職種の合議でなされ、親はその診断を受け入れるかどうかのサインをするとか。それを受け入れれば特別支援教育プログラムの対象となるシステムのよう。
そして、子どもの成長に伴いその時々にどのプログラムを我が子に選択するかは、親の理論武装で勝ち取って行くとか。
また、我が子の情報機密性も親に属し、他の支援を必要とするには情報提供にサインする。もし、サインを拒めば支援が受けられない仕組みのよう。
そこまで､障害児教育関係でも親としての自己主張と自己責任が課せられる社会のよう。（確かに、１２歳以下の子どもに留守番をさせると罰せられる社会でもある。）
それだけに、親は我が子の行動特性への具体的支援を求める理論武装のために、凄く勉強もし続けるとか。

一方、アスペルガー症候群の方のインタビューからは、周り（親、教師、等々）の人の話しかけ方、支援の配慮一つで、その場の状況が当人が理解できるかどうかということがあるよう。
例えば、自閉症児にしばしば見られる「耳ふさぎ」。音がうるさいから耳をふさぐのであり、何か云われるのを嫌がっているのでないという。
こうした単純なことの積み重ねの行動が、時に問題行動と見られがちという。
それ故、書名のように「深読みしなけりゃ　うまくいく」ということかな。
自閉症と診断された当人からの行動特性の解説としても、参考になることが多かった。

「自閉症だから」と一括りの支援でなく、正に、個々の当人の行動特性を具体的に理解・支援をすることこそ、特別支援教育の目指すべき姿と思う。
日本がそうなるには、まずは係わり手側（親、教師、等々）の観点の変容が問わているように思えた。

（2006 年 5 月 6 日　記）